

コロナ禍に生きる女性と子ども

大日向雅美 (恵泉女学園大学学長)

「人も社会も余裕をなくしたとき、ひずみはやはり弱者へ向かうのでしょう。どの子どもからも屈託のない笑顔がみられるように…。物語を紡ぎます」。演劇集団 Ring-Bong が児童虐待をテーマとしてこの5月に上演した『みえないランドセル』の作者山谷典子さんの言葉です。コロナに明けコロナに暮れているこの一年余りを振り返って、この言葉がいかに現実味を帯びているかを思わざるを得ません。

昨春、突如襲った新型コロナウイルスの世界的感染拡大に、未曾有の事態とはかほどのことかと驚きましたが、それ以上に日本社会の女性と子どもへの対応の冷酷さに胸ふさがる思いでした。突然の一斉休校・登園自粛にどれだけの親が戸惑ったことか、共働き家庭が専業主婦家庭を上回っている今日、子どもの預け先に右往左往したことは言うまでもありません。テレワークを推奨し、通勤を免除することでほぼ問題が解決するかなのような論調に、働く者は皆、シングルかデINKスと思っているのかと耳を疑います。狭い日本の住宅事情の中で、幼い子どもの世話をしながら仕事をこなせるのか、子育て中の親、とりわけ母親たちへの配慮がもう少しあったらと思わざるを得ませんでした。

ここ数年、メディアを賑わわせてきた“女性活躍”“子育て支援”は跡形もなく姿を消し、子どものことも子育てもすべて家庭に、女性に託して一件落着するかなのような風潮でした。

こうした中、何よりもしわ寄せを被るのは子どもたちです。親たちの苛立ちの前に身をすくめている子どもたちの姿が容易に想像されます。加えて連日、テレビなどから流されるニュースにおびえている子どもたち。“コロナが怖くてたまりません。不安で泣いてしまうの。どうしたらいいですか？”“お友達に会いたい。みんなも同じですか？”。昨春、NHKラジオ「子ども科学電話相談」で私に寄せられた声です。二人とも小学一年生の男児でした。受話器から聞こえてくる幼い声に胸の痛みを抑えきれませんでした。視点を世界に向ければ、早期から子どもに寄り添ったメッセージが発信されていて、子どもたちを社会の一員として認めて共に闘おうとする姿勢が明らかでした。

“経済大国”日本は、“女性・子ども小国”だという現実をいやとい

うほど思い知らされたこの一年でした。

日本社会で母と子が生きる現実にはなんとつらい課題が山積していることか、しかし、そこから目を反らしてはならない。現実を見つめる中からこそ、真の解決策が、そして、生きる希望が見出せる…。そんなことを考えさせられる演劇と映画が、今年になって相次いで登場しています。

一つは冒頭で紹介した演劇『みえないランドセル』。もう一つは映画『明日の食卓』（榎月美智子原作、瀬々敬久監督）。どちらも、良い母になりたいと願い、誠実につつましく生きている女性たちですが、母となったことでまるで罰ゲームのような仕打ちを受けていきます。その展開の壮絶さに息をのむ思いです。しかも、それがエンターテインメントの世界の話ではなく、あまりにも現実そのものである怖さに余計に目をそむけたくなります。

しかし、この二作ともラストシーンの温さと清々しさが秀逸です。『明日の食卓』では、母親と同じように傷つきながらも、母の苦しみを母を苦しめている闇の正体もしっかりと見つめている子どもたちがいます。『みえないランドセル』では“どの母親も無償の愛を注げるとは限らない。でも子どもは、母親に無償の愛をもっている”とのセリフがあり、そうであればこそ、子どもを守らなければ…、母親を支えたい…、と近所の人たちが動き出すのです。

コロナ禍で心が折れそうな今、この二つの作品が贈られるこの社会は、まだ希望が持てる、希望を捨ててはならないと心から思います。